「国際人のすすめ」中央大学特別講演会

前ユネスコ事務局長、日仏会館理事長

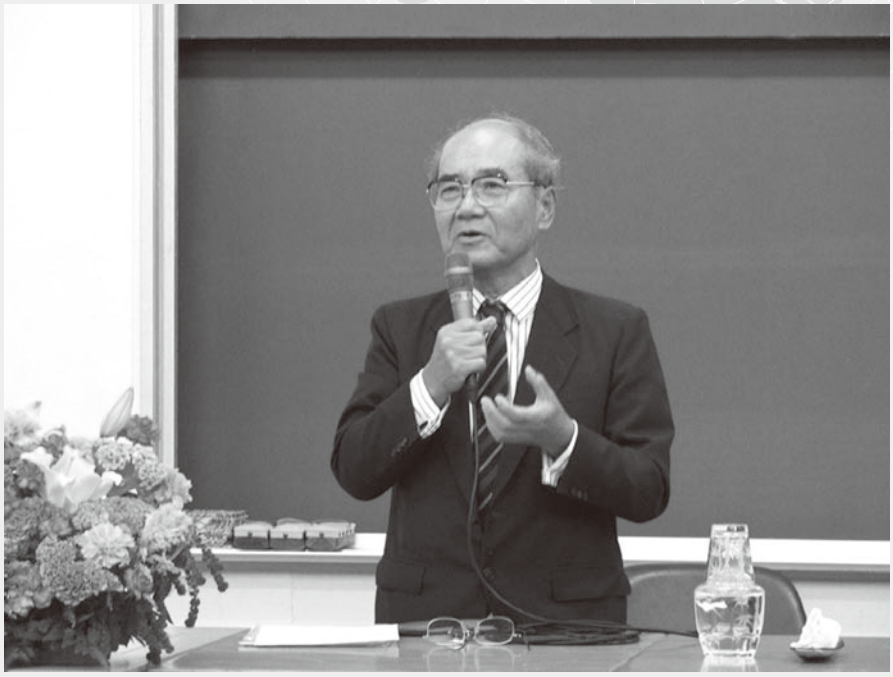
松浦 晃一郎氏

中央大学の新組織「国際連携推進機構」設立記念、中央大学特別講演会として行われた。
松浦晃一郎氏（75）は駐フランス大使、ユネスコ（国連教育科学文化機関＝UNESCO）事務局長などを歴任。
外交官40年、ユネスコ10年、合わせて50年の経験から語る「国際人のすすめ」。
10月3日、会場の中大多摩キャンパス8号館大教室は学生、教職員で満員だった。

小説から始まった

堅いと思われた講演は「私は小説が大好きでして、フランス文学、ドイツ、ロシア。小説を通して外国に興味を持ちました」と身近な話題から始まった。聴衆の中には「既に私は国際人」とうなずく学生がいた。

駐フランス大使、ユネスコ（本部パリ）勤務で16年間フランスに滞在。ユネスコ時代は190カ国を訪問した。英語、フランス語、スペイン語を話す。そうした経験から、学生らに「国際的に活躍できる人、国際機関で働く、リーダーになれるように」と話した。



日本を知る、外国を理解する

「日本人として日本の歴史、文化をしっかり勉強する。海外では一人ひとりの日本人が日本の代表として、日本については何でも知っていると期待される。外国に関心を持ち、異文化に対して理解を深めておく。国際問題や国内問題について国際的な視野で分析、日本史上・世界史上の位置づけも考えて、自分の考えを持ち、ほかの人と外国語で議論する。切磋琢磨するようになってほしい」

ユネスコ事務局時代は世界全体を考えた。運営が不満と脱退していた米国に改革案を提示、粘り強い交渉で理解を求めた。2003年10月、米国は19年ぶりに復帰した。ユネスコ中興の祖といわれるゆえんである。

人事採用では、最低限修士、可能な限り博士号取得者を求めた。

「自分の専門分野をしっかり持つ。専門を持ちつつも諸問題に対応するときは大局観が必要。その上でしっかり決断を下す」

「グローバルな人材育成に重要なのは大学教育です。卒業後も職場などで引き続き勉強してほしい」

講演中、立ったままで話した松浦氏。熱く語る姿に講演後は大きな拍手が巻き起こった

合気道と茶道に通じた
ドイツ駐日大使・シュタンツェル氏が来校
～批判する力をつけようと講演会～

ドイツを見つめ、日本を見つめ直す「中央大学インターナショナル・ウィーク（ドイツ）」のクライマックスは駐日ドイツ大使、フォルカー・シュタンツェル氏（64）を招いての「特別企画・講演会」。京都大に留学するなど親日家で知られる同大使は講演後、茶の湯を楽しみ、合気道部では稽古を披露した。講演も日本語で話すなど親しみやすい人柄が、多くの人を魅了した（7月10日、中大多摩キャンパス8号館8304号教室など）。

GKの気持ちで

フランクフルト大学に通う20歳のころ日本学、中国学、政治学を専攻。日独関係、ドイツとアジア関係にも精通。1972年に京大に留学中、日本に親しみ、合気道などを習ったというシュタンツェル大使の講演のテーマは「私たちは150年の日独関係から何を学べるか」。

日本人がもつドイツのイメージを学生ら聴衆に聞きながら講演を始めた。

「ビール、ベンツ（車）、ベートーベン（音楽家）、サッカー」

一方でドイツ人がもつ日本人のイメージを「すし、漫画、アニメ、福島原発事故」と紹介した。

大使によると、日本とドイツはお互い相手への関心が高く、価値観も似ている。性格も互いに勤勉で、戦略を同じように考えられる。共通点が多いことから親交は深まったと、150年にも及ぶ歴史観を説いた。

大型スクリーンにサッカーの代表チームＧＫのオリバー・カーン、川島永嗣両選手の真剣な表情をアップにして、「大切なのは判断力です。GKはボールがどこに来るか考えている。皆さんも考える力を養おう」と呼びかけた。分かりやすい説明に学生たちにうなずくしぐさが多かった。

お手本は森鴎外

ドイツ国内では東日本大震災後、国内エネルギーの供給を脱原発、代替エネルギーへの転換政策を打ち出し、国民の5分の4が賛成した。批判する力が大事という大使は「この判断は正しかったのか」と提言、判断力の重要性を訴えた。

その力を養うには、どうしたらいいか。身を乗り出す学生に「しっかり観察することです」。

大使は作家の森鴎外を例に挙げた。ドイツに医学を学ぶため留学中、ドイツをつぶさに観察して書いた小説『舞姫』には当時のドイツと日本人留学生の暮らしぶりが如実に表れていると絶賛した。

「授業で先生の言ったことを自分で判断してみましょう。判断力は習ったことや模倣で身に付くものではありません。自分で判断することです。これは日常生活、大学生活、就職してからも大切なことです」

質疑応答では中大生８人の質問に答えた。

商学部1年女子学生からの質問「私たちがドイツに学ぶべき点は何ですか」には、日本とドイツはよく似ているものの、相違点として日本は島国、ドイツは欧州の中心にあるため国際的意識が強いと分析しながら、国際感覚・視野を高めようと答えた。

ドイツ語での質問にはうれしそうに聞き入り、学習の成果だと褒めた。また自らブログを紹介。黒板にアドレス（次頁参照）を書いて、「授業が退屈なとき、これを見てください」と笑わせて講演は終わった。

真剣を止めた

講演後、中大生から白ユリの花束とベートーベンを歌った混成合唱団のCDのプレゼントがあった。

シュタンツェル大使は福原紀彦総長・

学長らと茶室「虚白庵」へ。茶道部による茶の湯のもてなしを受け、椅子席ながらも茶道の心得をさりげなく披露した。

その後は第一体育館・合気道部で約30分、胴着に着替えて部員とともに稽古に励んだ。

京大留学中、習ったという合気道は堂に入っていて、真剣を持つ相手と戦う稽古でも、判断力のよさで相手に付け入るスキを与えない。最後に木刀を贈呈され「きょうの稽古は忘れません。ありがとうございました」と一礼。大使の講演や合気道には、中大生も忘れられない日となった。

合気道のひとこま。右が駐日ドイツ大使

1948年クロンベルグ生まれ。1968年からフランクフルト大学で日本学、中国学、政治学を専攻した。1972年から京都大学に留学。1979年に外務省入省、1980年にケルン大学にて哲学博士号取得。その後、イタリア大使館、南イエメン大使館、社会民主党、ドイツ連邦議会会派外交担当、外務省原子力平和利用・不拡散政策担当課長、外務省政策局長（アジア・アフリカ・中南米担当）、中国大使などを経て、2009年12月から現職。休日の東京・柴又散策を計画中。ブログはドイツ大使館HPから「大使日記」。

「ドイツの経済と企業」の講演会も

インターナショナル・ウィーク（ドイツ）では6月20日に「ドイツの経済と企業」と題する特別講演会を開催した。

講師は3人。女性の在日ドイツ大使館公使・ベアーテ・メーダー＝メトカルフ氏が「現在の日独経済関係における論点」をテーマにマイクを握った。

東日本大震災後、ドイツは世界の工業国では初めて脱原発を決定。電力を再生可能エネルギーでまかなう方針に転換した経緯と効果などを力説。時節柄、最大関心事のテーマだけに会場には身を乗り出して聞き入る姿が目立った。

続いて解熱・鎮痛薬“アスピリン”の発明で知られる世界的総合製薬グローバル企業のバイエルホールディング社・代表取締役社長ハンスディーター・ハウスナー氏が「ドイツ企業の魅力～バイエル社の場合～」について、生活の質の向上を目指す同社の社会貢献活動を中心に説明した。

ヘルスケア、農薬関連、先端素材の領域を中核とする同社の現状や同社が150年余の歴史を有し、2010年に125周年を迎えた中大より“お兄さん”であるなどといった身近な例えを交えた。

ここまでは同時通訳だったが、3番目に登壇したドイツ・ノルトライン・ヴェストファーレン（NRW州）日本事務所長のゲオルグ・K・ロエル氏は流ちょうな日本語で周囲を驚かせた。

テーマの「ドイツNRW州～日本企業の欧州ビジネス・ハブ～」を日本への親しみをこめて、ゆっくり話した。同州は欧州経済の中心地で、日本人がビジネスや学問・研究に励む快適な暮らしぶりを紹介。さらなる日本企業の誘致を訴えた。

3人の講演は各20分間。大型スクリーンに各種の貴重なデータを写し出し、聴衆を惹き付けていた。

ハンスディーター・ハウスナー氏

ゲオルグ・K・ロエル氏

地域イベント開催で、ますます愛されるチームに

～中大アメリカンフットボール部～

大学と地域の融合を目指す中央大学アメリカンフットボール部はこの夏も恒例のイベント、「八王子シルクフェスタ」を開催した。あいにくの雨だったが、会場の中大ラグビー場は観客席が超満員になるほどの大盛況。メーンイベントの小・中学校生によるフラッグフットボール大会は、男女のちびっ子選手が見事なキャッチ、タッチダウンを次々に決め、観客席を大いに沸かせた。

ことしは新たに2～12歳のバトントワリング＆チアダンスチームが参加。可愛い応援に中大部員らが大きな拍手を送っていた。

今回で第6回になるこの催しは「愛されるチーム作り」を目指す同部が、勝利を求めると同時にチームに関わるすべての人とともに成長を遂げていくことを願って続けている。スローガンは「大学スポーツの活性化、大学と地域を結ぶ大学スポーツの新しいカタチ」。シルクフェスタのシルクは、八王子がかつて絹織物の名産地だったことに由来する。（7月1日、主催・中大アメリカンフットボール部、後援・日本フラッグフットボール大会、協賛・NGWジャパン）。

チームは関東大学リーグ戦が9月9日に開幕。初戦の東京都市大学戦に87－0で快勝。

11月11日の法大戦まで全7試合、甲子園ボウル（全日本大学選手権大会決勝）出場を目指して熱戦を展開する。

女の子の見事なキャッチ

雨の中、超満員の観客席
（写真提供＝2点とも中大アメリカンフットボール部）

落語から始めよう7カ国語習得

落語家 三遊亭竜楽さん 中央大学法学部卒

中央大学法学部卒の落語家、三遊亭竜楽さん（54）は7カ国語の外国語を話す。

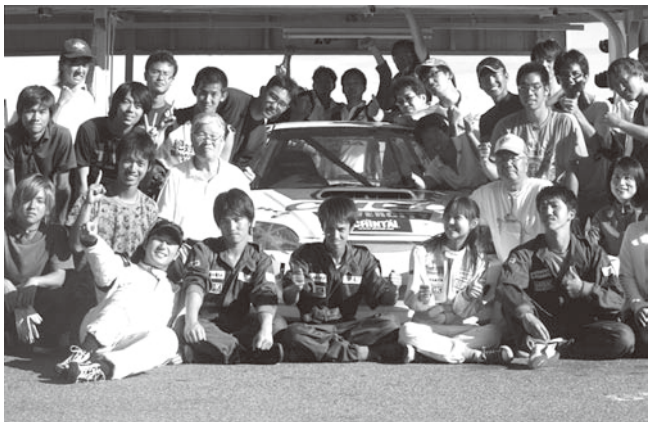
スペイン語、ドイツ語、イタリア語、英語、ポルトガル語、フランス語、そして日本語（!?）。勉強家らしく堪能な外国語を駆使して、主人と小僧・定吉とのやり取りが面白い噺「味噌豆」を7カ国語で演じた。発売中のCD「竜楽　7カ国語落語～味噌豆編～」がそれだ。

台所で調理中の味噌豆ができたかどうか。見ておいでと言われた定吉はつまみ食いをする。満足そうな顔の定吉を主人は使いに出す。自分も味見をしたい。「うまいねえ、味噌豆ってのは、おまんま（ごはん）にもいいし、酒のつまみにもなる」。ひとり悦に入っていると定吉が帰ってきた。慌てて厠（かわや＝トイレ）に小鉢をもって駆け込む主人。定吉は主人がいないことをいいことに、またまた、つまみ食い。主人の帰りを恐れて厠に行くと、そこには主人がいた…。びっくりした定吉が言う。「お代わりを持ってきました」。

この噺を7カ国語で聞く。同じ噺ながら、言葉の持つ味わいが楽しい。噺の下げ（オチ）だけ覚えても、外国語堪能だ。

疾走

自動車部 17年ぶりの栄冠



昨年の雪辱を果たし、全日本学生ジムカーナ選手権を制覇

全日本学生ジムカーナ選手権＝男子団体優勝（8月25～26日、三重・鈴鹿サーキット国際南コース）▼優勝・中央大学、2位・日本大学、3位・慶応大学▼個人2位・安津畑翔平、6位・土田秀幸、7位・森春陽。

全国から36大学が参加した。3人でチームを編成。1人の2回走行で、いいほうのタイムの合計が団体成績となる。中大のメンバーは、土田秀幸（商学部3年）、森春陽（経済学部4年）、安津畑翔平（同4年）各選手。

第1日の予選をトップ通過。最終日の決勝では土田選手が脱輪ペナルティを負ったものの、森、安津畑両選手が安定したドライビングを見せて栄冠に輝いた。団体優勝は17年ぶりだった。

11月の全日本学生自動車運転競技選手権に優勝すれば、全日本学生ダートトライアル選手権、全日本学生ジムカーナ選手権と合わせた「全日本総合杯3冠」となる。

自動車部の紅一点、細野日花里選手（法学部4年）が個人8位に入賞した。

4連戦

軟式野球部 初優勝

全日本学生選手権で初優勝、喜ぶ選手たち

全日本学生軟式野球選手権＝初優勝（8月27～30日、山口・下関市民球場）▼優勝・中央大学、2位・北九州市立大学、3位・愛知東邦大学、愛知大学名古屋学舎▼中大の戦績（以下同じ）1回戦・7－2国際医療福祉大学、2回戦・7－4広島大学、準決勝・6－2愛知東邦大学、決勝・7－5北九州市立大学。

エースの小熊智明選手（経済学部3年）が大活躍した。準決勝で155球の完投勝利。決勝では救援でチームを優勝に導いた。大会は4日間の連戦続き、全4試合に登板し、19回2失点、防御率0.95と抜群の安定感で最優秀投手賞に選ばれた。1966年の創部以降初めての優勝、46年目の頂上。準優勝3度、昨年は初戦敗退だった。

中大 チャンピオン 優勝ラッシュ

力泳

水泳部 連覇

日本学生選手権を2年連続14度目の制覇、
選手たちはプールの中からVサイン（提供＝水泳部）

日本学生選手権水泳競技大会＝2年連続14度目総合優勝（9月7～9日、東京・辰巳国際水泳場）▼優勝・中央大学、2位・中京大学、3位・日本大学。

競泳部門は2年連続14度目のチャンピオン。初日はやや出遅れたが第2日、最終日で差を詰めた、各種目で確実に上位に入り、400mメドレーリレーを制し、2位に40点差をつけた。水泳部にはインカレ11連覇という栄光の歴史がある。今回で2年連続、輝く歴史を繰り返す。

堅実

準硬式野球部 連覇

2年連続で全日本学生選手権を制した

全日本大学準硬式野球選手権＝2年連続10度目優勝（8月27～31日、愛知・瑞穂公園野球場ほか）▼優勝・中央大学、2位・甲南大学、3位・九州産業大学、大阪経済大学。▼戦績1回戦・4－0徳島大学医学部、2回戦・3－1関西学院大学、3回戦・6－0名古屋商科大学、準決勝・2－1大経大、決勝7－2甲南大。

最近5年間で4度の全国制覇だ。戦いぶりは堅実そのもの。犠打、盗塁で得点圏に走者を送り、ワンチャンスをものにして得点を重ねていく。投手陣は清水彰仁選手（商学部3年）らの奮闘で相手を2失点までに抑えた。全日本の連覇記録は1966年から4連覇の中京大。次の目標3連覇へ手堅い野球で突き進む。

陸上競技部、出雲で3位　箱根へシーズン好発進

出雲で、多摩キャンパスで「行け!　ちゅうおう」の掛け声が相次いだ。大学駅伝のシーズン開幕戦、「出雲全日本大学選抜駅伝」（主催・日本学生陸上競技連合ほか）は10月8日、島根県出雲大社前から出雲ドーム前の6区間44.5kmに21チームが参加して行われ、伝統復活を目指す中大が2時間11分35秒で3位に入った。優勝は青山学院大で初制覇、2時間9分41秒は大会新記録。2位は東洋大で2時間11分10秒だった。

●1区代田が区間1位

東京―箱根間（217.9km）より距離が短い出雲はスタートが肝心と各校は1区（8km）にエースを投入する。優勝候補の駒大、早大が出遅れるなか、中大は代田（しろた）修平選手（経3）が向かい風をものともせず、外国人留学生選手との激しい展開から抜け出して23分29秒、区間1位の好記録をマークした。2区からアンカーまで区間3位をキープして、前年9位、前年タイム2時間14分35秒をそれぞれ大幅に上回った。次のレースは全日本大学駅伝で11月4日、箱根駅伝は来年1月2－3日だ。

●キャンパスに応援700人

出雲駅伝の模様は多摩キャンパス・Cスクエアでパブリックビューイングとして放送された。700人超の参加者が応援グッズのオリジナルマフラータオルを手に声援を送っていた。

■出場選手

1区・代田修平（経3）2区・藤井寛之（経1）3区・多田要（経2）4区・徳永照（経1）5区・塩谷潤一（理工4）6区・西嶋悠（文3）各選手。

盛り上がったパブリックビューイング

世界三大美書を公開

―多摩キャンパス中央大学中央図書館　11月12日～12月8日―

世界三大美書の一つとされる「チョーサー作品集」（1896年）や
「エドワード・バーン＝ジョーンズ絵画集」（1899年）など
極めて貴重な約20点が中央大学中央図書館の所蔵となった。
11月12日～12月8日まで、学生や一般に公開される。

理想の書物

「チョーサー作品集」とは、19世紀英国の工芸デザイナー、ウイリアム・モリスが設立した私家版出版工房「ケルムスコット・プレス」による出版書籍53点中の最高傑作だ。世界三大美書の一つとの高い評価を得ている。

古書に詳しい雄松堂書店（東京・新宿）によると、「19世紀末、産業革命の成熟により、“もの”は安易に大量生産されるようになりました。モリスはそれを批判し、活字や用紙など書物に関するすべてに徹底的にこだわり、『理想の書物』を作ったのです」

同作品集は425部が製作された。このうちダヴス製本所で特装版（豚革装幀本）として48部が仕立てられ、中大で展示されるのはこの特装版である（写真）。

中央大学法学部の里麻静夫教授は16～19世紀英国の詩と演劇を専門分野としている。ケルムスコット・プレスに関して、「19世紀英国の詩人・美術工芸家・社会思想家ウイリアム・モリスが設立した印刷所である。そこが刊行した書物は美術品としての価値が高く、それと連動して、価格も高い。かなり高額であるために本学が未所蔵だった『チョーサー著作集』をはじめとするケルムスコット・プレス刊本とモリス並びに彼の周辺の作家達に関連する稀覯本を色々と購入できることで、本学図書館の存在感は大いに増すだろう」と述べている（中大HP・教育&Chuo Onlineより）。書籍購入は東京大学名誉教授で昨年死去した嶺卓二先生からの寄付金による。

同時に展示されるエドワード・バーン＝ジョーンズ絵画集は、モリスの朋友である画家の作品。写真銅版画による美しい画集。こちらも必見だ。